
花唄

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花唄

【Nコード】

N7625B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

お花見。恋人と一緒に来る筈だったのに相手はまだ来ない。美佐子はそのことにふてくされて自棄酒を飲んでいると。春なのでお花見のお話です。

第一章

花唄

桜が咲きその花びらが舞う。かぐわしい香りと人々のそれ等を楽しむ声がする。しかしその中で一人つまらない顔をして飲んでいる女がいた。

黒い髪にうっすらとウェーブをかけ淡い化粧をしている。黒く縁のない眼鏡が実によく似合っている。何処か知的な雰囲気を漂わせるこの女性は今一人座って酒を飲んでいた。

「遅いわね」

彼女の名を萩原美佐子という。ごく普通のOLでごく普通の生活をしている。今がごく普通に彼氏とお花見をする為にここに来ていたのであった。

しかしここに来たのは彼女だけだった。彼氏の宮脇一成はまだ影も形も見せてはいない。そんな彼を待って今ビールを少しずつ飲んでいるのだ。

お弁当やお菓子、ビールをこれでもかという程持って来た。特にお弁当は手作りで彼女が一成の為に夜遅くまで念入りに作ったものである。しかしその彼が来ないのだ。これで面白い筈がなく詰まらない顔で今こうして一人で飲んでいる有様なのであった。

「なあ姉ちゃん」

そこにガテン風のいかついおっさんが二人やって来た。腹巻と濃い髭が如何にもといった感じであった。しかも彼等はそれぞれ一升瓶を抱えている。本当に見たままの花見での酔っ払いであった。

「どうしたんだい？ 一人で」

「友達来ないのかい？」

「はい、まあ」

美佐子是不機嫌な顔でその二人に答えた。

「そうなんです。それで困って」

「ふうん、何か困った事情になってるみたいだな」
男達のうちの太った方が言ってきた。

「まあそれでもだ」

今度は痩せた方が言ってきた。

「待ってりゃそのうちいいことがあるぜ」

「そうそう」

彼等は口々に言う。

「何たってな。今日はお花見だ」

「いいことがないとな」

この言葉は完全に酔っ払いの言葉であつた。根拠がある筈もなかった。

「だからよ。待っておくんだな」

「桜でも楽しみながらな」

「ええ、そうします」

少し笑みを作つてそれに応えた。相変わらずその手には缶ビールがありそれが離れはしない。

「それで誰を待ってるんだい？」

「お友達だよな」

「いえ、彼氏なんですけれどね」

苦笑いをしてこう答えてきた。答えると同時にビールを少し飲む。もう顔は結構紅くなっている。それがほんのりと桜色になっていて彼女も桜になっていた。

「まだ来ていないんですよ」

「おう、彼氏と一緒にお花見か」

「そりゃまたいいねえ」

彼等はそれを聞いて顔を綻ばせてきた。

「俺達なんてあれだからな」

「そうそう」

二人は顔を見合せて言い合う。

「仕事仲間で集まってどかんと一杯」

「女の子なんか一人もいねえ」

「そうなんですか」

「といってもあんたを誘ったりはしないよ」

「そんなことやったらセクハラになっちまうからな、ははは」
次に笑って述べてきた。

「まあ待ってりゃいいさ」

「そうだよな、やっぱり」

「桜が見ているぜ」

彼等は言う。

「優しくよ」

「そういうことだな。桜ってのはやっぱりいいもんさ」

痩せた男は酔った目で桜を見る。その顔も完全に酔っているがそれでも桜はしっかりと見ていた。

「心をな、安心させてくれるからな」

「はあ」

「だから娘さん」

優しい声をかけてきた。

「待ち人来たらずなんてのは考えなくていいからな」

「ゆっくり待てばいいってことだな」

太った男も言ってきた。

「そういうことだろ」

「その通りだ」

彼は同僚に応えた。

「じゃあこのままいればいいんですね」

美佐子もそれを聞いて何か安心してきた。それで問うた。

「そうですよね」

「ああ、そういうことさ」

「わかりました。それじゃあ」

こくりと頷いた。その言葉を受けることにした。

「このまま待ってます」

「おう。じゃあな」

痩せた男はここで左手で敬礼するような仕草を試みせた。悪戯っぽい仕草だがそれがやけに様になっていた。何処か気さくでそれでいて格好がつくものであった。

「またな」

「はい」

「じゃあ俺も」

太った男も仲間の真似をして左手で挨拶した。右手の一升瓶が絵になっている。

第二章

「ゆっくりとしていきなよ」

「ええ」

こうして二人は去った。美佐子は一人だけになった。そしてまた飲み続けるのであった。

ビールから日本酒になる。もうかなり飲んでいるがそれでも飲めた。コップに酒を注ぐとそこに酒とはまた別のものも入ってきた。

それは花びらであった。一枚の花びらが酒の上に舞い降りてきたのだ。

「あら」

美佐子はそれを見て思わず声をあげた。白く浮き通った花びらの上にそれが静かに漂っていた。それを見ていると春をさらに実感するのであった。

花びらを見ていると優しい気持ちになるのを感じる。つい笑ってしまった。

その微笑のままコップを口に近付ける。それを酒と一緒に飲んだ。春と同じ味がした。

「ふう」

それを飲み終えると心がさらに気持ちよくなった。目を閉じそのままうとうととしだした。

どれだけ眠ったろうかと言ってほんの少しだった。誰かが肩に手をかけてきていた。

「美佐子ちゃん」

若い男の声だった。今その声が語り掛けてきていた。

「美佐子ちゃん。起きて」

「誰？」

「僕だよ」

彼はこう言ってきた。

「遅れて御免。かなり待ったみたいだね」

「一成君？」

「そうだよ」

ここでもようやくその目をうつすらと開けた。するとそこには若い爽やかな感じの男がにこやかに笑っていた。その笑みで美佐子を見てきていた。

「遅れて御免ね」

「遅かったじゃない」

苦笑いを彼に向けて言った。

「何していたのよ」

「寝過ごしてね。それで」

「何やってるのよ」

咎めはしたがそうなったのもわかった。春はつい眠くなってしまったものだ。彼女も今寝てしまった。だからそれをきつく言うことはどうしてもできはしなかったのだ。

「まあいいわ」

「許してくれるの」

「ええ。だってお花見はこれからだからね」

そう言って起き上がる。そして上を見上げた。

空には花吹雪が舞っている。それを見ていると何か優しい気持ちになるのだ。

「ねえ」

そのうえで一成を見た。彼はまだ申し訳なさそうにしている。

「飲めるわよね」

「勿論」

彼も笑顔で返してきた。その為の花見であるからこれは当然だった。

「その為に来たんだし。車も置いて」

「そうなの」

「そうだよ。じゃあ飲もうよ」

「お酒もおつまみもたっぷりあるわ」

「それにお弁当もだよね」

「えっ」

何故それを知っているのか問おうとした。しかし一成の方が早かった。彼女の後ろを指差して言うのだ。

「その重箱だよね」

「ええ、そうだけれど」

見れば出したままであった。それを見ているとすぐにわかった。

「一緒に食べていいかな」

「そのつもりで持ってきたんだけど」

美佐子はそう述べた。

「じゃあいいよね」

「ええ、一緒にね」

「飲んで食べて」

「お花の中で」

重箱を開けると豪勢なおかずが出て来た。そこにも花びらが一つ。ふわりと舞い降りてきた。

「あら」

「春だね、本当に」

「そうね」

それを見てにこりと笑い合う。二人の周りを花びらがふわりふわりと舞いながら遊んでいた。その中で二人は春を楽しむのであった。うららかで香りよい桜の中を。

花唄 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7625b/>

花唄

2010年10月8日14時40分発行